派遣報告書

氏名　　中村隆之（総合国際学研究院リサーチ・フェロー）
派遣先　　フランス社会科学高等研究院（EHESS）
派遣期間　　2011 年 6 月 26 日ー2012 年 3 月 31 日

派遣概要および成果

報告者は、上記期間中フランス社会科学高等研究院に客員研究員として所属し、研究課題「フランスにおける文学と植民地主義　カリブ海フランス語作家研究 1930 年代−1980 年代」に取り組んできた。本研究は、2010 年度の研究課題「フランスにおけるカリブ海文学の展開　1930 年代—1980 年代」を発展的に引き継ぐものである。前年度はフランス海外県マルティニック島、グアドループ島、ギュイヤンヌ（仏領ギアナ）出身の作家によるフランス語表現文学の展開を跡付けたが、今年度は、個々の作家および作品を「文学と植民地主義」というテーマ群によって分析・読解することを試みた。

本研究を推敲するために、前年度に引き続き、資料収集を行なった。とくに、前年度には入手できなかった文学作品や、カリブ海フランス海外県の現代史を扱った政治・経済・歴史関係の研究書を収集した。一例をあげれば、グリッサンの第一詩集『島々の野』（Un champs d'îles）の初版（1953 年、500 部）、人文地理学者ギイ・ラセールによる総合的グアドループ論（1961 年、全 2 巻）、経済学者アラン=フィリップ・ブレラルのマルティニック・グアドループの経済史（1986 年）などである。収集したものの大半は国内の大学図書館では所蔵していないか、全国で一、二冊程度所蔵しているに過ぎない資料である。

また、本研究と関連する、所属機関をはじめとするセミナーや学術的行事に定期的に出席するとともに、9 月にはグアドループおよびマルティニックへ計 2 週間の調査旅行を行ない、関係者に面会した。

派遣期間中、いくつかの文章を出版する機会に恵まれた。

１）エメ・セゼール『ニグロとして生きる』（法政大学出版局、2011 年）。立花英裕氏との共訳。

２）「来るべき世界の叙事詩——パトリック・シャモワゾー『カリブ海偽典』」（『思想』第 1051 号、岩波書店、2011 年 11 月、pp.78-87）。

３）「「高度必需」とは何か？——フランス海外県からポストコロニアル状況を

考える──」(『立命館言語文化研究』第 23 巻 2 号、立命館大学言語文化研究所、pp.101-111)。

４)『フランス語圏カリブ海文学小史』(風響社、2011 年)。全 68 頁。

このうち、本研究に直接関わるのは４）である。本書は 1920 年代から 1980 年代にかけてのカリブ海出身のフランス語表現の文学の展開を跡付けたものである。なお本書には本派遣プログラムによる助成であることを文中に明記した（66 頁を参照)。

今後の課題

本研究は、派遣先で収集した資料を活用し、国内で継続することを目ざしている。具体的には、2012 年 2 月以降、人文書院の web で公開している一連の論考（論考の目下の総題は「カリブ-世界論」）をとおして、引き続き研究成果を公表する所存である。また、国内外の学会やセミナー等の発表の場も活用し、短期派遣 EUROPA の支援を受けた成果を今後も意欲的に公表するつもりである。